

■（１７４）かつての面影確かめる重要なお盆に悲しい出来事

震災３年５カ月の月命日だった。多くの犠牲を出した釜石・鵜住居の防災センター跡そばで朝から夕方まで、花を手向けに来る遺族を待った。首都圏から来た夫婦、妊娠中の妻を亡くした男性、母を亡くした高齢女性…。お盆直前のためか、予想より少なかった。

近くのプレハブで花店を営む女性は言う。「３回忌過ぎてから減った」。一帯は次の津波に備えて、平均１・７メートル土盛りする。その工事のため今夏から、多くのエリアが立ち入り禁止となった。自宅跡に入れない遺族もいる。さらに工事が進めば、被災跡の残る地面は、土盛りの土砂で覆われる。区画整理でまちの姿が変わる。遺族にとって今夏は、被災前の面影を確かめる重要なお盆だった。家族が犠牲になった場所に花を置いて手を合わせる人や自宅跡にヒマワリやコスモスなど季節の花を咲かせ続ける人。それぞれの流儀で続けてきた祈りの場がまもなく消えていく。センター跡地の慰霊の施設も移転を迫られる。

そんな盆の１５日夜、隣の大槌町の旧役場前でまた、慰霊施設のさい銭が盗まれた。今度は大きな箱ごとだ。あまりの悲しさに、取材する側もしばらく脱力してしまった。（山）